

GINZA ILLUMINATION 2016 「光の庭園 Jardin de Lumière」開催中! La rue principale de Ginza transformée en un Jardin de Lumière!

2016年12月3日(日)銀座の街が薄暮に包まれる頃、一斉に中央通りの樹々と花かごに暖かな光が灯りました。日没とともに輝きを増していく「光の庭園 Jardin de Lumière」。この「光の庭園」プロジェクトに、exprimeは企画・プロデュースという形で参加させていただきました。
今月のEXは、銀座の「光の庭園」とこれまでexprimeが手がけてきた光のプロジェクトについてご紹介いたします。

Ce dimanche 3 décembre, des bouquets de fleurs de lumières ont éclot à Ginza, apportant une touche festive à ce haut-lieu du luxe. Le "Jardin de Lumière" est un projet d'exprime que nous vous présentons dans ce numéro de EX, vous invitant à y déambuler jusqu'au 9 janvier 2017.

光の先進国に育まれて Le pays des villes lumières

exprime社長のマニグリエ真矢がPITAYAに出会ったのは、2010年フランスで開催されたLumiville (国際ライティングトレードショー)。大阪市のサポートで参加した真矢が、隣の出展ブースに面白い二人組がいる!と声をかけたのが、知り合ったきっかけとか。真矢の故郷フランスは、「光」の活用に関するプランニングやデザインの発祥の地であり、いわば光文化の先進国。

そのフランスの中でも、世界唯一の「光の都」として名高いのが、PITAYAの出身地リヨン。フランス南東部に位置する(パリから飛行機で1時間、高速鉄道TGVで2時間)、パリに次ぐフランス第二の都市で、豊かな食文化を誇る「美食の街」としても有名です。聖母マリアに感謝を捧げ、窓辺にキャンドルを灯す市民の祭りが発展し、世界有数のイルミネーションイベント「光の祭典Fête des lumières」となりました。この「光の祭典」は、PITAYAが光のアーティストとして活躍するきっかけとなり、現在、名譽あるアンバサダー・アーティストを務めています。2002年このリヨンに設立された「LUCI (光景創造国際ネットワーク)」は、「光」による都市活性化に取り組み都市や自治体を支援しています。現在、五大大陸に及ぶ世界的ネットワークとなり、真矢は日本の窓口として、2009年大阪市のLUCI加盟に尽力しました。
フランスで培った光文化への理解、感性、ネットワークを駆使し、大阪、兵庫県西宮市の「光」のプロジェクトにも企画、プロデュース、PRツールのデザイン、講演、審査委員など様々な形で参画しています。

Maïa MANIGLIER, présidente d'exprime, a rencontré PITAYA en 2010 à l'occasion de Lumiville, salon international de l'éclairage à Lyon. Le stand de PITAYA étant voisin de celui de la ville d'Osaka qu'elle avait dirigé, elle fut charmée par leurs oeuvres et décida d'aller leur parler. La France est le pays où la lumière est née. Pionnier en matière de design comme de planification urbaine de la lumière, c'est le pays leader en la matière. La ville de Lyon, particulièrement avancée dans la conception de lumière pérenne comme événementielle, fut le berceau de PITAYA. Deuxième ville de France, située à deux heures de train de Paris, Lyon est non seulement la capitale de la gastronomie mais aussi une capitale de lumière. La Fête des Lumières s'appuie sur la tradition des Lumignons de la fête de Marie. Ces chandelles sont mises à la fenêtre par les lyonnais et petit à petit se développa jusqu'à devenir un événement mondiallement reconnu. PITAYA eu ainsi l'occasion d'œuvrer à de nombreuses reprises dans la lumière et d'être choisi comme Artiste Ambassadeur de la Fête des Lumières. Le réseau LUCI (Lighting Urban Community International) rassemblant les villes de lumière de cinq continents fut créé à Lyon en 2002 et Maïa y fit affilier la première ville japonaise, Osaka, en 2009, la représentant depuis auprès du réseau. Cette maîtrise du domaine créatif, la compréhension d'une certaine vision de l'espace urbain, la connaissance des artistes qu'elle a acquis dans ces domaines lui ont permis de concevoir les projets lumière pour les villes d'Osaka et Nishinomiya.



街に笑顔を!

まちづくりの有効な解決策として注目されているのが「光」の活用。集客・経済効果、防犯・治安、節電など様々なメリットをもたらします。何より、イルミネーションは空間はもちろん、人の心をも照らします。住んでいる人々の誇りになります。幸せな笑顔を咲かせます。今回の「光の庭園」から摘み取った花のような光のチャームが、スタッフ用、GILCのショップ用として製作されました。銀座を歩き交う人々が皆、このチャームで胸元や帽子を飾り「光の庭園」を散策してくれたなら、どんなに嬉しかったことでしょう。
銀座という街を歩き交う人々が作りあげてきたように、イルミネーションも「ひと」がいてこそ美しく完成します。
皆さまもぜひこの冬だけの特別な銀座を訪れ、作品の一部となって参加し、PITAYAとexprimeの願いを叶えてください。
「光」文化による日仏の交流を日本の都市に広げていくのが、exprimeのライフワークです。

Faire fleurir les sourires!

La lumière est un excellent outil de design urbain. Atouts économiques, touristiques, de réputation, sécuritaires, les avantages de la lumière sont multiples. Plus que tout, la lumière illumine en même temps les espaces et le cœur des gens. Les habitants se réapproprient leur ville. La lumière est une magie qui fait apparaître les sourires.
Cette année nous avons imaginé des "charmes", des fleurs merveilleuses que nous avons cueillis aux arbres de ce Jardin de Lumière et que vous verrez dans les boutiques des membres de GILC. A la boutonnière ou au chapeau, ces charmantes fleurs de lumières transforment la foule de Ginza en un parterre de fleurs de lumière qui vient compléter et parfaire le Jardin imaginé par exprime et PITAYA. Le souhait que fait exprime est d'œuvrer à faire éclore la lumière franco-japonaise dans les villes nipponnes.



銀座にきらめく花たちを



東北復興を願い、Ginza International Luxury Committee (GILC) / 銀座通りと晴海通りにショップを構える国際的なラグジュアリーブランド20社による委員会主催で開催されてきたGINZA ILLUMINATIONプロジェクト「ヒカリミチ」。6回目を迎えた今年は、exprime提案の「光の庭園」がテーマとなりました。
デザイン・制作を手がけたのは、二人のフランス人アーティスト David Lesort (ダヴィッド・ルソー)と Arnaud Giroud (アルノー・ジルー)によるクリエイションスタジオ PITAYA (ピタヤ)。フランスの光の都リオンを拠点に国際的に活躍する二人が、銀座のために幻想的な庭園を設えました。光の花々が咲き誇る樹々と、女神の腕にかけられたような光の花かごが織りなす、永遠に連なっていくような景観。照明を落とした日中の時間帯も、美しいオブジェとして銀座の街を華やかに彩ります。
夜は綺麗でも、昼間の電球むき出しの姿を見てしまうと興ざめ、そんなイルミネーションは銀座には似合わない。
帽子やブローチ、コサージュ等の代表的なモチーフである「花」を、ファッションブルな街銀座に咲かせたい。
銀座を飾るイルミネーションにぴったりのカラーは、華やかで上品なゴールドと白。
exprimeが考える銀座という街にふさわしい最高のイルミネーションを実現できるアーティストは、昼も夜も美しく街を彩る景観クリエイションを目指し、「自然」をテーマに作品を制作しているPITAYA以外にはありえません。「街を訪れる人、行き交う人たちが参加して作品の一部になってほしい」というexprimeの思いにPITAYAも共感し、彼らの作品制作の指針となっています。11月末に来日し、自ら高所作業車に乗って作品の調整を行い、最高の状態に仕上げました。(PITAYAの独占インタビューとプロフィールを裏面に掲載)

Transformer Ginza en un Jardin de jour et de nuit

La mise en lumière de GINZA ILLUMINATION « hikarimichi » est organisée par GILC (Ginza International Luxury Committee) et l'association des commerçants de l'avenue de Ginza (Chuo-dori). Pour cette 6ème édition c'est le projet d'exprime qui a été choisi par le comité, mettant en scène les oeuvres de PITAYA, le studio de création de David Lesort et Arnaud Giroud. Les deux artistes lyonnais ont imaginé un jardin fantastique, un cheminement qui offre une nouvelle approche de cet espace urbain, de nuit bien sûr mais aussi de jour.
Une œuvre de lumière existe aussi dans la journée et se doit de vivre dans l'espace quelques soit le moment, c'est une condition indispensable pour une avenue aussi fréquentée que celle-ci!
L'avenue de Ginza, temple de la mode japonaise, a inspiré à travers les motifs floraux des corsages et des chapeaux un thème de flore intemporel.
Le chic de Ginza, guide historique de la mode japonaise, a été source d'inspiration pour les couleurs comme le blanc et l'or choisis pour les bouquets.
Cette vision d'exprime, conçue sur mesure pour Ginza, trouve avec PITAYA l'expression parfaite de cette conception de la ville, de la lumière, de la double facette diurne et nocturne. Une création qui entraîne le public à s'approprier les objets et à devenir une partie même de l'oeuvre. Les artistes sont venus eux-mêmes chaque nuit à Ginza, sur des échelles et avec pinces et cordons, composer chacun des bouquets qui vous sont offerts. (interview exclusif de PITAYA au dos)



GINZA ILLUMINATION 2016 ヒカリミチ〜光の庭園〜
期間 2016年12月3日(土)~2017年1月9日(月・祝) 15:00~24:00(点灯)
場所 銀座・中央通り1丁目から8丁目

exprime が参画した主な光のプロジェクト Projets Lumière d'exprime

大阪市主催「OSAKA 光のルネサンス」
日仏光交流プロジェクト・コンセプターとして「光のマルシェ」企画・運営(2008-14年)。
フランス大使館後援「フランス・デ・リュミエール」コーディネーターとして、「光」を通じて日本とフランスをつなぐ交流エリア「フランスアベニュー」企画・運営(2009-14年)。
大阪市中央公会堂のプロジェクト・マッピング「アヌキが大阪にやってきた!」企画・アーティスト招聘(2014年)。

西宮市「酒蔵通り 光の宴」
プロデューサーとして、「光の掛け軸」の長谷川章氏とPITAYAの光による日仏競演を実現(2012-15年)。
夜の酒造博物館をめぐるNight Museum(2012-13年)、光のアートを背景に白装束のストリートパフォーマンスが繰り広げる「光のサーカス」(2014年)、華やかなりパリの喧騒を彩ったバル・ミュゼットをイメージした「光のミュゼット」(2015年)など、訪れた人々が参加して楽しめるイベントを企画。

Ville D'Osaka « OSAKA renaissance par la lumière »
«Le marché de Lumière» de 2008 à 2014 a été conçu comme un échange de lumière Franco-japonais.
«France des Lumières» sous le haut patronnage de l'Ambassade de France au Japon fut inauguré en 2009 par la mise de lumière du centre d'Osaka et de l'avenue France ». De même pour la projection sur la facade du Central Public Hall «Les anooki à Osaka !» en 2014

Ville de Nishinomiya « Festin de Lumière » (2012 à 2015)
"Festin de Lumière", évènement mélangeant les oeuvres de Akira Hasegawa «Digital Kakejiku» et de PITAYA. L'évènement se renouvelle chaque année avec un nouveau thème participatif pour le public : visite nocturne de musée, cirque de lumière, bal muette de lumière.



PITAYA, résonnance de deux personnalités d'artistes

気鋭のアーティスト PITAYA 響き合う二つの個性

銀座の光にぬくもりを

—銀座という街の印象は？

Davidさん(以下D): 縦にも横にも直線が強いという印象。世界的なブランドや素敵なお店が並んでいて綺麗な街だね。

Arnaudさん(以下A): 色々なことが起きて、色々な人が来て常に動いている街だと思う。歩行者天国にはびっくり! アナウンスもないのに、人々が自然に真ん中の車道に入って行って、パブリックスペースを自分たちのものにしていくなんて。

—銀座のイルミネーションの、見どころや苦労した点等をきかせてください。

D: 縦のラインの強さは戦えないし、ガラス面の冷たさも強く感じたから、「花」という自然をテーマにして春のような暖かさを表現したかった。たくさんの人たちが木の周りに集まって自分たちの木にしてくれれば、人のぬくもりも加わるしね。

A: 複数の光源と光の色温度で遊んで、既にある直接的で強個性な光とのギャップによる世界観をつくらう、と。遠くを見た時に、パースペクティブに縦線が繋がっていく中で、光がどう見えるかが大事。永遠に連なるオブジェ(花かご)と、ところどころに木を置いて、人間と植物との関係を再現した。自然そのものより、自分たちのフィルターを通して花を提案することで、都心の街の銀座にマッチする自然になる。ゴールドを中心とした色を選んで、電球も暖かい色、木や花は丸みのあるラインに。縦線の街の構造と冷たい色の光に、落差、神聖、パロディック、高級感をイメージし、ファンタジーをプラスしたかった。

—光のアーティストとは？

A: 色々な定義がある、新しい仕事。ルーツはいくつかの分野に渡っていて、建築関係やデザイナー、グラフィック、芝居の演出等に関わっていた人たちが光のアーティストとして活動している。僕自身は、オブジェや商品のデザイナー出身。光へのアプローチにも色々あるけど、僕はプロジェクションより三次元に対する思いが強いし、光るオブジェや構造物で遊ぶのが創作テーマ。世界の光の基準で、光のメッカとも言えるリオンでデビューできたのが、僕たちにはいいチャンスに繋がった。光のアートを始めた頃は知らないことが多くて(JTの連続! ある意味、今でもそれは変わらなくて、「光」は実験無しにクリエイションできないと思ってる。

—PITAYAって、とても可愛らしくて神秘的な響きですね。ユニット名の由来を教えてください。

A: PITAYAはDavidがレユニオン島(インド洋の島でフランスの海外県)で立ち上げた。島にたくさんあったドラゴンフルーツ(pitaya)の、形や味のコントラストの面白さに惹かれ

てDavidが付けたんだ。今は、その由来にとられることはなくて、自分たちで新しい言葉に育てていっていると思う。

D: 可愛い響き、というのは意外! 僕にはPI-TA-YAというすごく強い響きを感じられるから。僕の干支がdragonだからユニット名にしたというわけではないけど、龍の強さに勇気付けられるような気がしたのかもしれない。

—リオン生まれリオン育ちのお二人の、リオンのお薦めは何でしょうか？

D: アンパサダー・アーティストとしては、「光の祭典」を一番に挙げなくては。(笑)お薦めと言われると難しいけど、古い街並みながらも綺麗だと思える。料理は「タブリエ・ド・サブル」(tablier de sapeur / 牛ハチノスのリオン風カツレツ)がお薦め。

A: マルセイユとパリの間にある光と食の街。ワインの産地ボジョレーも近い。気候のいい時に、古い街を見て歩くのは楽しいよ。夏にも音楽や映画のフェスティバルがあるしね。広い川が二つ流れていて、川を境にしたそれぞれの地域の個性が面白い。

一番の「敵」で「鏡」

—お互い、どんな存在ですか？

A: 一緒に仕事を始めてから12年。年寄りの夫婦みたい(笑)に、いいところも悪いところもよく知っているから、すぐにシンクロできる。どちらかがリードすることがあっても、どちらが強いか弱いかということはない。何よりも大好きな友人!

D: 一番の「敵」であり、「鏡」であり、ベストフレンド。毎日会って楽しい相手だけど、お互い歳をとったよね(笑)全く違う個性を持っているっていうのがいいと思う。

—お二人の間で役割分担はありますか？

A: クリエイションは二人とも必ずやる。学生の頃、Davidは金属、僕は木工を専攻した。コミュニケーションは僕の方が得意で、Davidは予算化したり、職人さんたちとの関係を構築したりするのが得意。

—西宮に続き、三度目の来日ですが、一番お気に入りの日本の食べ物は何ですか？

A: 順番はつけられない。順番をつけることに抵抗を感じる。食べるものそのものや、ランクの上下よりも、食卓を囲む時間が大事。居酒屋のわいわいがやがやした雰囲気や、食に関して、チャレンジという言葉はアグレッシブに感じる。好奇心を大事にしてるんだ。D: 下町風のところから神戸牛が出るような高級店まで、色々なお店に連れて行ってもらったけれど、どれも美味しく、ハズレがないのに驚いた。帰国してから、お好み焼きや蕎麦、ラーメンなんかを家でもつくってみたいけれど、日本で食べた時ほど美味しくでき

なかったなあ。西宮神社の向かいのごく普通の居酒屋で、真矢とArnaudと三人で過ごしたのがとてもいい思い出だよ。

—今後、日本でどんなイルミネーションを手がけてみたいですか？

A: 光が多く溢れているエリアとタッチされていないエリアとのギャップが興味深い。水の上を走る高速道路は初めて見る空間だった。高速道路の下を光らせるとか、光で変えてみたい。目立たないところや暗いところに光を活用して、プロムナードの個性を出したり、夜のアートや今迄とは違う東京を発見するナイトクルーズを展開したり。港にはワクワクするほどたくさんの可能性を感じるよ。以前訪れた直島みたいに、アートのないエリアにアートを持っていけたらと思うけど、住民にとっていい形で喜ばれるようなプロジェクトにしたい。

D: 真矢が企画してくれるんだしたら、何でも頑張るけど(笑)公園や庭園、神社やお寺でやってみてほしい。自然の中で自然をつくってみたい。

インタビューを終えて

あふれる思いを熱く語るArnaudさんと、言葉よりも感性の人なのかシャイで寡黙なDavidさん。食に対する飽くなき好奇心が共通点でした。近い内に、お二人とその素敵な作品に再会できますように。(7月14日のArnaudさん、11月28日のDavidさんへのインタビューを再構成しました。)

Un vent de finesse pour les lumières de Ginza

—Quelle est votre impression du quartier de Ginza ?

David Lesort (DL): la verticalité des lignes tout d'abord, la profusion de lignes droites aussi. De belles boutiques dans une remarquable avenue.

Arnaud Giroud (AG): un quartier dans lequel il y a toujours du mouvement, de toutes sortes de personnes, de toutes sortes de tendances. J'ai été surpris, à l'heure où l'avenue devient piétonne, de voir les gens sans annonce particulière se diriger vers la chaussée pour s'approprier cette partie de l'espace urbain.

— Quel épisode ou point remarquable dans cette illumination de Ginza ?

DL: Nous avons intensément ressenti la verticalité des lignes et le côté un peu froid des nombreuses surfaces vitrées de Ginza. Nous avons voulu y apporter une flamboyance. Un côté un peu baroque. Nous avons choisi un thème symbolisant la nature: les fleurs de lumière. Il a fallu réfléchir l'avenue comme une déambulation, où les passants découvrent les "sculptures" lumineuses au gré des trottoirs. Les passants de Ginza qui se rassemblent autour des arbres et des fleurs rajoutent de la chaleur humaine à ce tableau.

AG: Avec le choix de fleurs offrant une multitude de points de lumière et la température de lumière sélectionnée, nous avons voulu créer un monde en rupture avec la lumière existante directe et forte. Il a fallu placer nos points de lumières dans ces verticalités architecturales. La ligne des corbeilles suspendues qui s'étire à perte de vue et les points d'ancrages des arbres forment un maillage reliant l'humain et le naturel. Plutôt que la nature elle-même, la vision que nous en avons et le monde que nous avons créé nous a semblé en adéquation parfaite avec le caractère et l'histoire de Ginza. Le choix de l'or en couleur principale, les couleurs chaudes des sources lumineuses, les courbes douces des arbres et des fleurs... tout cela dans cet univers vertical et froid, contribue à y apporter cette touche baroque, complémentaire et à la fois en opposition. Une atmosphère, luxueuse et fantastique. Presque sacrée.

PITAYAプロフィール
2003年設立。食品から照明まで様々な分野において、遊び心と詩情に富んだスタイルを展開。2006年以降は、独創的、革新的な手法で、光の祭典やクリスマスイルミネーション等を手がける光のアーティストとして活躍中。照明そのものが発するエネルギーはもちろん、その周辺のエネルギー消費の削減にも取り組む彼らのプロジェクトは高い評価を受け、「エコロジカルな光のインсталレーション賞」(2011年)等を受賞。世界各地に活動の場を広げており、アジアでのデビューは、2012年兵庫県西宮市「酒蔵通り 光の宴 FESTIN DE LUMIÈRE」(〜2015年)。日本の折鶴がインスピレーション源となった「光の渡り鳥」等で人々を魅了した。今回が関東での作品の初のお披露目。

Portrait d'artiste PITAYA, studio de création fondé par David Lesort et Arnaud Giroud.
Fondé en 2003, PITAYA œuvre dans des domaines multi-disciplinaires du design. En 2006 le studio ouvre son champ de création à la lumière événementielle en milieu urbain et développe une approche originale qui verra ses premières réalisations exposées à l'occasion de la Fête des lumières de Lyon ou lors d'illuminations de Noël plus artistiques. Leur approche écologique, dépassant la seule consommation d'énergie des sources de lumière est reconnue et le studio est distingué en 2011 du «prix de l'installation lumière écologique». La réputation de PITAYA est vite reconnue en dehors de l'hexagone et leur première installation en Asie se concrétisera en 2012 avec «Festin de Lumière» à Nishinomiya. Le Jardin de Lumière est la première occasion pour le public de Tokyo de découvrir le monde plein de charme et de poésie de PITAYA.



- Qu'est-ce qu'un créateur lumière ?

AG: Il y a de nombreuses définitions. C'est un domaine très nouveau dont les acteurs viennent de métiers divers comme l'architecture, le design, le graphisme, ou les arts de scène... il y a autant de définitions que d'acteurs dans ce domaine. Moi-même je viens du monde du design industriel. Il y a aussi plusieurs approches de la lumière, personnellement plus que la projection d'une lumière c'est la tri-dimensionalité qui m'inspire. Mes thèmes de création s'orientent autour des objets ou structures lumineuses. Nous avons eu beaucoup de chance de pouvoir commencer notre carrière à Lyon, la capitale mondiale de la création lumineuse par excellence. Nous avons débuté nos réalisations sans vraiment avoir l'expérience et avons appris petit à petit, de manière empirique. C'est d'ailleurs toujours le cas; dans la lumière sans expérimentation pas de création possible!

—PITAYA est un nom qui sonne mystérieux et un peu kawaii aux oreilles des japonais. Quel en est l'origine ?

AG: David a créé PITAYA à la Réunion. Il a été séduit par les fruits du même nom qui y poussent. Pitaya veut dire fruit du dragon. Leurs formes, le contraste entre leur aspect et leur goût lui a beaucoup plu. C'est étonnant car aujourd'hui, lorsque j'entend le nom PITAYA, je ne pense plus du tout au fruit. Pour moi c'est notre studio, notre entité. C'est toujours lorsqu'il faut expliquer l'origine de notre que je me souviens que c'est aussi un fruit!

DL: Je suis tout à fait surpris d'apprendre que vous trouvez le nom un peu kawaii. Pour moi les syllabes PI-TA-YA sonnent puissamment. Peut-être parce que mon mon signe d'astrologie chinoise est le dragon? Ce n'est pas directement relié mais il me semble y puiser une certaine force et énergie.

—En tant que Lyonnais, quel conseil pour connaître le vrai Lyon nous donneriez vous ?

DL: En tant qu'Artistes Ambassadeurs, c'est la Fête des Lumières bien sûr! (^.^) Ensuite, pour ce qui est du "vrai Lyon" la question est très difficile. C'est une ville magnifique mais qui s'apprivoise... La vieille ville est très belle. Pour les plus aventureux, le tablier de sapeur et l'andouillette sont des spécialités à ne pas rater!

AG: C'est la ville de lumière et de la gastronomie. Située entre Marseille et Paris, et proche des vignobles du Beaujolais et de la vallée du Rhône. Aux beaux jours, déambuler dans le vieux Lyon ou se promener sur les quais est une belle promenade lorsque le soleil se reflète dans l'eau. L'été il y a aussi beaucoup de festivals de musique et de cinéma. Le centre urbain sur la presqu'île donne à la ville une dimension très particulière.

Mon meilleur ennemi et mon miroir

—Comment vous voyez vous l'un l'autre ?

AG: Il y a douze ans que nous travaillons ensemble, nous sommes un vieux couple (^.^). Chacun connaît les bons côtés et les côtés sombres de l'autre, ce qui nous permet d'être synchrones rapidement. Même si l'un de nous prend l'ascendance selon le projet, ce n'est jamais pas une question de hiérarchie. C'est avant tout une superbe amitié!

DL: Arnaud est mon meilleur ennemi et en même temps mon miroir. C'est aussi mon meilleur ami. C'est un plaisir de le voir chaque jour, et en même temps nous voyons vieillir avec tout ce que cela implique! (^.^). Je pense que c'est notre différence qui est le fondement notre relation et de notre entente.

—Comment vous répartissez vous les tâches ?

AG: Le processus créatif est fait par nous deux. David a une formation dans les métaux, moi dans le bois. La communication extérieure est plus aisée pour moi, et David a plus de facilités que moi pour gérer les budgets et tisser des liens avec les artisans.

—Après Nishinomiya, c'est votre troisième séjour au Japon, quel est votre plat préféré ?

AG: Je ne peux pas mettre d'ordre. Je ne sens pas à l'aise avec l'idée de donner un ordre de préséance. Plutôt que le menu ou le nombre d'étoiles, je privilégie la convivialité des moments. J'aime bien l'ambiance joyeusement bruyante des Izakaya. Dans le Kansai j'avais bien aimé les Okonomiyaki. Je n'aime pas tellement dire «challenge» en ce qui concerne la table, je trouve le terme trop agressif, je préfère «curiosité».

DL: Nos amis japonais nous ont emmenés dans des tout petits restaurants familiaux comme dans des grandes tables de boeuf à Kobe. Chaque adresse était délicieuse, et où que nous allions j'étais toujours ravi de ne jamais avoir de mauvaise surprise. Une fois rentré à la maison j'ai essayé de refaire des okonomiyakis et des ramen, mais ce n'était jamais aussi bon.

L'izakaya en face du sanctuaire de Nishinomiya dans lequel Maïa nous a emmené reste un de mes meilleurs souvenirs culinaires, une grande émotion.

—Quelles illuminations voudriez vous créer dans le futur au Japon ?

AG: Je suis fasciné par la différence entre les zones hyper éclairées et les celles où la lumière n'est pas présente. C'est la première fois que je vois une autoroute suspendue au-dessus d'un cours d'eau. J'adorerais mettre en lumière ces espaces. Amener la lumière sur des endroits cachés et sombres, proposer un parcours, créer de l'art nocturne et des promenades en bateaux sur ces canaux qui feraient découvrir un autre Tokyo. Je suis aussi très excité par toutes les possibilités que j'ai ressenties lors de ma visite de la baie de Tokyo. Comme à Naoshima et Teshima que j'ai eu le bonheur de visiter, je pense qu'il faut amener la création artistique là où elle n'existe pas. C'est un plus gros challenge, mais c'est aussi à mon sens plus durable dans le temps car cela implique directement les habitants du lieu.

DL: Si c'est un projet de Maïa, tout m'intéresse et je m'y donnerai à fond! (^.^) Les jardins et les parcs me tentent bien, car le défi de concevoir la nature dans la nature est très intéressant.

Message de la rédaction

Merci au loquace Arnaud et à David dont l'expression passe plus par les sensations que par le verbe, d'avoir répondu à nos questions. Tous deux dévorants de curiosité pour la gastronomie et pour la culture. Nous sommes persuadés avoir bientôt l'occasion de voir de nouvelles œuvres de PITAYA au Japon.



EX-EXPO exprime célèbre son 20^{ème} Anniversaire エクスプリム 創立20周年記念
Vendredi 13 Janvier 2017 2017年1月13日金曜日 11:00~20:00
Gallery 5610 東京都港区南青山5-6-10 5610番館 Tel.03-3407-5610 5610Ban-kan, 5-6-10 Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo

5 Minamiaoyama Omotesando Aoyama st. Shibuya Akasaka mitsuke

● SPIRAL ● CICADA ● B3

Gallery 5610

“EX”は、exprimeのアイデア・デザイン力をご愛顧いただくための機会として発行しております。 EX est conçu, imaginé, crée, rédigé, dessiné, photographié, mis en page, traduit, imprimé, façonné, entièrement et uniquement en interne par l'équipe d'exprime : T.O., N.N., H.C.